

明鳥(上) (明鳥花濡衣)

へ白雪の積もるも恋にたくらべて 解けぬ思いを浦里が どうした縁で彼の人に逢うた初手から可愛さが 身に染み／＼と惚れぬいて あけて口惜しき鬢の髪撫であげ／＼

「浦里 もう誰も差合はないかや

「見世が出たれば今の間は 誰も来る事ではござんせぬわいな

「ヤレ／＼この広い二階に 身一つ置き所のないというは

「アア因果な身になつた事じゃなア

「サアこの様に堰きせかれ さぞ氣詰まりでござんしょう

それを堪えて下さんすも みんな私が可愛いと思うてのお志

嬉しゅうござんす かたじけないわいなア

へ抱きしむれば いやおれ故と引きしめて 物をも言わずしめ合いて あと
は涙にくれけるが

「いつまでこうしていたとても 限りもなき二人が仲 長居する程
そなたの身詰まり この程段々話す通りかのお人へ 色々と手を
回し言い入れても 叶わぬ望みと願い書まで 突き戻されし身の
本意なき

へそなたも共にと言いたいがいともしそなたを手にかけて どうなるものぞ
ぞ長らえて 我が亡きあとで一ぺんの 回向を頼むさらばやと言ひ捨て立つを
へアもし取り付いて あんまりむごい情けなや 今宵離れてこなさんの
のまめで居さんすその身なら また逢う事のあるうかと 樂しむこともあ
るべきが かねて二人が取り交わす 起請誓紙はみんな仇 どうで死なんす
覚悟なら 三途の川もこれこの様に 二人手を取り諸共と へなぜに言うて
は下さんせぬ 殺しておいてゆかんせと 男の膝に縋り付き 身を震わして
泣き居たる へ遣り手の萱が声として

「子供や緑や エエモ誰も居ないのか オオオ浦里さんエ

「アイお萱どん 何の用でござんすエ

「他の用じゃござんせぬが 夕べから居続けのあの客人 ありや

どこのお方でござんすエ

「さあどこやらのご子息さんじゃ という事でござんすエ

「イエ／＼そうは抜けさせぬ 確かにせかれたあの時次郎

旦那さんが呼んでじゃ ござんせ エエござんせ

「アアこれお萱どん どうぞ許して下さい

へ一ト間の内より山名屋四郎兵衛

「エエまだるい／＼ そんな甘口で聞く奴じゃねえ

さあおれと一緒にうしやがれ

へ罪も報いも後の世も 白髪頭のこめかみも 張り切るばかりのやら腹立ち
引つ立ててこそ降りにける へあとに大勢男共 屏風の内の時次郎 無
二無三に引き出だし 踏むやら打つやら叩くやら すぐに表へ突き出だし
門の戸はたと閉めにけり

明烏(下) (明烏花濡衣)

へ折ふし降りくる雪吹雪 うちには亭主が浦里を 庭の古木に括りつけ箒
おつとり 声荒らげ

「ヤイ／＼浦里 その苦しみやア心がらだ 総別遊女を折檻して
客を堰く事客の為 二つにやあ女郎大切 身代はこりやマ猶大事
あの客もまだ若い人の様だが あんまり繁々通われちゃア
親がかりなら勘当 又主持ならばしくじる道理 こんじゅう
年期の切り替えしも みんなあの客の為 この上は心中するか
駆け落ちか サとどの括りや知れてある詮索幾ら言つても
聞き入れのねえ あの時次郎の事ハ モすっぱりと思いつても
しまえ アアこれ男ども 浦里を気をつけい

へト言い捨ててこそ奥に入る 浦里あとを打ち眺め 別れとなれば今更に
涙に暮れて居たりしが

「あの時さんは どこにどうして居さんす事じゃやら マ一度／＼顔が
見たい 逢いたいわいなア

へ昨日の花は今日の夢 今は我が身につまされて 義理という字は是非も
なや

「あの二階で弾く三味線を 聞くにつけても思い出す いつぞや主が
居続けに 寝間着のままに引き寄せて 弾く三味線の面白さ

それに引き替えこの苦しみ アア味気ない浮世じゃなア

へ好いた男にわしゃ命でも 何の惜しかろぞ露の身の 消えば恨みもなき
ものを

「わしがこの身は モどうなるとも

へたとえこの身は淡雪と 共に消ゆるも厭わぬが この世の名残に今一度
逢いたい見たいとしゃくり上げ 狂気のごとく心も乱れ 涙の雨に雪解け
て前後正体なかりけり へ男はかねて用意の一と腰 口に咬えて身を固め
忍びしので屋根伝い 見るに浦里嬉しやと 悲しさこわさあぶなさに 可
愛と一と声明がらす 後の浮名や残るらん